

「ウィリアム・ブレイクの人と芸術」

京都市立芸術大学名誉教授 潮江宏三

1. 日本におけるブレイク受容の展開のなかでの寿岳文章の役割

私は大学時代からずっとウィリアム・ブレイクと関わってきました。ただ、それまでのブレイク研究者とは異なり、美術史という立場からブレイクを研究しており寿岳先生と少し視点やポジションが違います。

ただ今回お話しするにあたって、寿岳先生のお仕事や細かい内容にまで触れることはできませんが、概括的に研究者として、先生がおおよそどのような位置におられたのか、ということをご紹介したいと思います。それを皮切りにブレイクの芸術について簡単に触れていきたいと思います。

資料「ウィリアム・ブレイク略伝」と資料「日本におけるブレイク受容の展開のなかでの寿岳文章の役割」をご覧ください。略伝にありますように、ウィリアム・ブレイクは1757年、ロンドンの職人階級に生まれ、1827年に亡くなっています。ちょうどヨーロッパが大きく変貌するフランス革命をはさんで生きた人です。その中でフランス革命に対して、自分はどのように生きるのかという問題をたえず真摯に考えて、それを糧に詩を書いた人です。詳細はあとでふれましょう。

後者の資料は、京都大学で「国際ブレイク研究会」なる学会が開催されて、その折に京都大学の博物館で展覧会を開催しました。その展覧会の目録に基づき作成しました。私も関与していますが、主として私どもの美術館（京都市立美術館）の学芸員、後藤氏が大半を編集いたしました。ここにあげた年表などは後藤さんが作成したものです。では概略をかいつまんでお話しします。

ブレイクは1827年に亡くなっていますが、日本でブレイクの紹介が初めて行われたのは1893(明治26)年です。そのあと1895(明治28)年には上田敏、ラフカディオ・ハーンという文学者、特に上田敏はブレイクの詩を翻訳しています。岡倉天心、夏目漱石も含め、詩人、木下杢太郎もブレイクに言及し、それから坪内逍遙、そういう人たちが伝記を紹介しています。蒲原有明、小野竹三、三木露風、岩野泡鳴などもブレイクの詩を翻訳しました。ただし、これらは多くの場合、ブレイクの初期作品 *The Songs of Innocence and Experience* (『無垢と経験の歌』) からの翻訳が大半で、あと処女詩集 *Poetical Sketches* (『詩によるスケッチ』) を紹介するくらいの域しか出ませんでした。実は後半期の預言書と呼ばれる長い文章で書かれた作品は、難解きわまり翻訳できず、紹介もされていません。ここに挙げていませんが、戦後、評論家でもあり翻訳家の福田恒存が翻訳をしています。後期作品の翻訳は難物で、内容の解釈が大前提となりますので、すぐに翻訳には着手できません。単純に日本語にうつすという問題ではないからです。

そうした状況で1910(明治43)年、雑誌『白樺』が創刊され、1912(明治45)年に柳宗悦がブレイク研究に着手し、それから二年後、1914(大正3)年、『白樺』4月号でブレイク特集がなされました。この特集号はブレイク研究のうえで決定的な役割を果たします。白樺世代の人々はこの特集号を

通してウィリアム・ブレイクを知り、やがて関心が集まりました。

その後、英文学者の山宮允が本格的な研究者として参加する一方、柳宗悦は『キリヤム・ブレイク—彼の生涯と製作及びその思想』という大著を出版してその影響力は決定的なものとなります。

年表の右側に書いてあるのは画家の仕事ですが、面白いことに土田麦僊に理屈っぽくて、オーソドックスで古典的な影響がみられ、それから岸田劉生は当然、白樺派と近かったので、若き日の作品（《麗子像》の発表以前）にウィリアム・ブレイクの影響を強くうけた作品を描いています。

そしてブレイク受容のうえで大きな転機は、1915(大正4)年、白樺主催による第7回美術展覧会でした。それまでは白樺派の役割は詩、文学など言語上のブレイクの紹介に終始していましたが、柳宗悦を通してはじめてブレイクの詩に代わり粗末な複製画でしたが、その絵画作品が紹介されたのです。それが東京（日比谷美術館）と京都（京都府立図書館）の2ヶ所で開催されたました。

資料の次ページに移りますが、この頃に東京の岸田劉生の《カチカチ山と花咲爺》を別にすれば、京都の画壇では麦僊以外に、村上華岳の《聖者の死》、入江波光の《降魔》という形でブレイクの影響が作品に反映されます。とりわけ《聖者の死》と《降魔》はちょうど1918(大正7)年に京都、あるいは日本美術史に欠かしてはならない「国画創作協会」(国画会)が結成された年であり、村上も入江も「国画会」の主要メンバーでしたので、また土田麦僊もそうですから、この人たちはブレイクの洗礼を受けるところから、画家として仕事をはじめています。もちろんブレイクだけでなく、ゴッガン、セザンヌなどからも影響を受け、自らの新しい日本画に着手していったのです。

こうした風潮のなかでブレイクが少しずつ浸透していきますが、やがて1922(大正11)年から1923(大正12)年にかけて、土田も、入江も、国画会の有力メンバーがそろってヨーロッパへ遊学します。それを契機としてウィリアム・ブレイクの影響が、まるで「つきもの」が落ちたごとく見えなくなってしまいます。つまり雑誌『白樺』という限られた範囲内でしか情報が入ってこなかったために、ブレイクしか見えていなかったのです。彼らがヨーロッパ美術全般を体験するに及び、急速に視野が広がり、自分たちの芸術的な志向に従っていくわけです。そうしたなかで唯一、ブレイクを信奉し続けた画家こそ村上華岳でした。

そのうちに英文学者、山宮允がブレイクの翻訳、訳注を世に問い、柳宗悦が京都、同志社大学でブレイクの講義をして、徐々にではあるが確実に影響が広がっていきます。幡谷正雄、土居光知という英文学畑のブレイク研究者も活躍しました。

記念すべきことに、京都市立絵画専門学校（現京都市立芸術大学）で1927(昭和2)年、柳も参加して、ブレイク没後百年記念の講義を行っています。卒業生であった村上、入江、土田という画家たちは、ブレイクに深く傾倒していました。この没後百年を記念して幡谷も展覧会を開いたのですが、京都博物館では、柳、山宮、寿岳文章三者が共同で「百年忌記念ブレイク作品文献展覧会」を開催しましたが、これは京都文化にとり重要な意義をもたらしました。ここで初めて寿岳文章氏の名前が出てくるわけです。京都大学を出て直後のこと、展覧会で柳のサポートをする形で寿岳先生のブレイク研究のデビューがなされていたわけです。

寿岳文章氏はとくに書誌研究、ブレイクの文献等に関する研究に没頭され、そうした研究成果が二年後の1929(昭和4)年、『キリヤム・ブレイク書誌』として結実しました。そして「ブレイクの画論」という先生の論考が京都市立芸術大学の同窓会誌『美』に紹介されています。(実は私がこの雑誌をなぜ所持しているかと申しますと、若いころに私が『ウィリアム・ブレイクの素描』という

単行本を出しましたが、当時、同大学で日本画を専攻していた大野俣嵩先生がウィリアム・ブレイクに心酔されていて、そこに序文も寄せて頂いて、大野先生が関心を持っている作品も論じた次第です。そういうご縁からこの会誌を頂戴したわけです。)

この展覧会を通じて寿岳氏もブレイク研究と紹介に参画することになり、ちょうど 1920 年代末から 1930 年代にかけての戦前の困難きわまる時代に研究に従事したということになりましょうか。

そして寿岳氏の足跡の中で、もっとも重要なのは、私家版出版を実践されたことです。私自身はいまだに実物を見る機会に恵まれていないのですが、たとえば、寿岳さんの私家版の仕事に訳詩書『唯理神之書』というものがあります。これはただ理性だけの書という意味ではなく、私は『ユアリズンの書』と訳していますが、ブレイク神話の中に出てくる「合理性と支配の神」、これを「ユアリズン」というのですが、そういうものについて書いた預言書があって、それを先生は翻訳して、その挿絵を復刻し本として復元したわけです。要するに精巧な複製本をつくったわけです。1927 年にブレイク百年忌がめぐり来たわけですが、ヨーロッパではすでに精巧な複製がつくられていました。今日のような印刷技術が発達していない時代にはリトグラフを使用し、さらに手描きで彩色をしていました。そうして複製の感化を受けて、寿岳氏もまた複製をつくろうと志して最高の和紙を使って美しい本を生み出したのです。その結果として同時に和紙研究にも関心をもつようになりました。

さて、つづいて『無染の歌』（『無垢の歌』）、初期の彩色本ですが、『無明の歌』、『永遠の福音』などの複製本を陸続と先生は刊行していきます。

ここから年表が飛んでいます。残念ながら私自身がほとんど資料を持ち合わせていないからです。私が若い頃に直接的なかたちで寿岳氏に触れたのは、ダンテの『神曲』を翻訳されて、それにウィリアム・ブレイクの挿絵を組み合わせる三巻本で集英社から出された時でした。当時、ダンテを通してブレイクをみるということはほとんどできなかったもので、そういう意味では非常に助かったわけです。全体で 100 点あまりになりますが、京都大学図書館に白黒のファクシミリが所蔵されているだけで、実見できませんでしたが、先生の『神曲』の出版により容易に見ることができるようになりました。さらに厄介なのは、中期の作品として 537 枚に及ぶ水彩画による『夜想』がありますが、これは 1984 年まで全面的には研究者に紹介されていませんでした。研究もまだまだ進行状態で、その他まだわかっていないことが多々あります。近年の一大事件としては『墓場』というロバート・ブレア詩集のための挿絵を描き（1805 年）、その銅版画を他の彫り師が彫ったのですが、散逸していたブレイクが描いた下絵がこぞって出てきたという大発見がありました。

結論的に申しあげますと、寿岳文章氏が果たされた役割は、柳宗悦が追究したブレイク紹介を受け継ぎ、詩と絵画を融合させてブレイクを忠実に紹介されたことではないかと思えます。ブレイクのそうした両芸術を融合させた仕事の紹介という点において、寿岳先生のお仕事はきわめて重要なもので、もし仮に向日庵で出版された本がいずこかに残っているとすれば、じつに貴重なものではないかと信じます。つまりブレイク紹介者としての誠実な努力は尊いものではないかと思う次第です。俯瞰すれば寿岳先生のブレイク研究は以上のような位置づけになりましょうか。

2. ウィリアム・ブレイクの人と芸術

概略的に考えて、ウィリアム・ブレイク研究は、日本においても欧米でも、詩から入っていく場合が非常に多いです。ブレイクを最初に全般的に紹介したのは 19 世紀半ばの英国のラファエル前派でしたが、その周辺にいた人が初めてブレイクについての伝記を書いています。ブレイクのあまた残された水彩画にタイトルをつけ、基本的な解釈を施したのは、ラファエル前派の中心的な人物、美術批評家であるウィリアム・マイケル・ロセッティでした。ラファエル前派は絵画、文学も合わせて重視するという視座でしたが、次第にブレイクの詩が重視されるようになっていきました。また、ウィリアム・ブレイクの絵画はおおよそ英語圏にあり、とくに日本みたいな遙か彼方では、細々とした複製を見るしか仕方がなかったわけです。ゆえに詩作品からブレイクに入っていくのは当然の経路であったのです。

実は 1957 年の半ば頃に、ニコラ・ブッサン研究で有名なアンソニー・ブラントという研究者が *The Art of William Blake* (『ウィリアム・ブレイク研究』) を出します。この研究書を嚆矢として、いわゆるブレイクの芸術を単独で説明するのではなく、ヨーロッパ芸術の伝統の中で、ブレイクの絵画芸術がどのような位置を占めているか、という研究が始まっていきました。そこから実は、ヨーロッパ、日本を問わずブレイクの美術史的研究が本格的に始動していったといえましょう。ですからそれほど過去からではなく、研究史としてはいささか浅いわけです。私も若いころにその本に出会って勉強し始めていて、これが重要なターニングポイントになりました。

最近はいろんな伝記的な事実や資料もたくさん出てきていますので、今までとは違ったブレイク解釈が多様に提示されているという状況にあります。

あとはウィリアム・ブレイクその人について簡単にお話をしていきたいと思います。

先ほど紹介しましたように、1757 年にロンドンで生まれています。父親はホイザー（ニットの下着を扱う仕事）、長男は家業についたのですが、彼は小さいときから絵が好きで、絵ばかり描いていたので、父親は懸命に貯蓄してウィリアムをバースにある素描学校に通わせます。当時、この素描学校は基本的には物づくりの職業の基本的なデッサンを勉強するところであると同時に、アカデミーに入学するための予備校という二つの役割を兼ねていました。

学校の主催者の弟であるウィリアム・バースという人が、必ずしも自分自身の意思ではなかったのですが、ソサエティ・オブ・アンティクィティ（「古物研究協会」）というところから派遣されて比較的早い時期からギリシアに行っています。ギリシアでのデッサンを持ち帰り、おそらくこの時にブレイクはそれを見ているわけで、ロマン主義者といわれているブレイクですが、意外なことに古典的な作品にも触れています。

しかしブレイクは画家になりたかったのですが、経済的な状況が許されないうえに、職業的な可能性として銅版画師という仕事が開かれはじめていた時代で、その結果として、彼は自分の仕事を、妥協しつつ銅版画師という職業を選びました。ジェームズ・バサイアのもとで徒弟となり、6 年間に及ぶ徒弟仕事に従事します。

1779 年に徒弟期間が終わりますが、心残りがあつたらしく、実は自分は絵描きになりたかったということの思いだし、ロイヤル・アカデミーに入学します。しかし、半年で学校を辞め、1780 年に銅版画師として工房を開き仕事をはじめます。このように生活の資をかせぐわけですが、銅版画師という仕事は、原画をもらってそれを銅版に彫るという独創性を必要としない仕事です。複製版画

師という職業なのです。

1782年、キャサリン・ブッチャーと結婚し、書き貯めてあった作品を集め詩集 *Poetical Sketches* (『詩によるスケッチ』)として出版します。ブレイクはいくつかの本を書いています、活字で出版した詩集はじつはこれだけなのです。これが最大の特徴で、出版社を通して自分の作品を出版するのではなく、彩飾本という形式で自分の著作をことごとく出版しています。それは手刷りの版画です。この「彩飾本 (illuminated books)」は、通常言われているのですが、ブレイクは中世の彩飾写本を見る機会があり、つまり『ベットフォードの祈禱書』がフランスからイギリスに到来し、イギリスの本屋の尽力により公開されました。その折にブレイクはおそらく見たのだらうと言われていいます。それに基づいて白黒の線だけの絵ではなく、色彩のついた挿絵をつくろう、その際に、手描きだけではなく、版画を基本にしてデザインをつくって、その上に彩色をして本をつくろうとしました。これが「彩飾本」にほかなりません。この時に新しい技法を開発しています。これこそが凸版の銅版画です。通常、銅版画は凹版ですが、凸版は余分な部分を酸でことごとく除去し、残った部分に木版と同じく、インクを乗せて刷る。さらにその上に手彩色していくゆえ彩飾本は各々仕上がりが異なるというわけです。それが最大の特徴でしょうか。

3. 資料の一覧にある彩飾本について

ブレイクの特徴は、初期作品は当時の出版物と併走しながら出版されていますが、1790年頃に出された『天国と地獄の結婚』あたりから、少し調子がやや違ってきて、最後の『アルピオンの娘たちの幻想』、『アメリカ』、『ヨーロッパ』では何を表現しているかということ、アメリカ独立戦争からフランス革命に至る社会変化をブレイクが神話的に解釈して描いているのです。しかし、そうした時代動向だけでは、人間の歴史の必然性は理解できないとして、ブレイクは再度、人類歴史を根底から考え直してみようとして試みたのが、『ユアリズンの第一の書』に他なりません。世界は誤れる神によって創造された、よってこの誤った現世があるというのがブレイクの考え方です。そのあと、そういう世界を誰が立て直すか、人間のうちのどのような力でもって立て直すか、それを擬人化して書いたのが、『ロスの歌』、『アハニアの書』、『ロスの書』です。ここで、1795年の時点でブレイクはこうした革命的な態度で書き続けることに疲弊をおぼえ、さらにこういう自己の仕事に集中するあまり、銅版画家としての仕事から遠ざかってしまい雇用の機会も減り、やがて収入の道が閉ざされていきます。そうした事情ゆえ、1795年以降、ブレイクにとっては困難な時代に入っていかなざるをえませんでした。

ブレイクの生涯を通して考えるときに、そうした苦境を救ったのが、1799年から着手した、トマス・バッツという生涯にわたる支援者が委嘱した聖書画制作でした。聖書の挿絵を描くことで、もう一度キリスト教思想でもって世界をどのように救済するか考え直そうとする方向が少しずつ開けていくのです。これが大きな転換期となり、以後、『ヨブ記』、さらに『ミルトン』、『ジェルサレム』といった偉大な預言書へとつながっていきます。そこにはキリスト教思想を根幹にしながら、大きな神話的枠組みのなかでいかに人間が救済されるか、そういった物語が紡がれていきます。その時にもっとも重要な要素はアートです。アートとイマジネーションつまり芸術と想像力です。これが重要な因子であるわけで、そうした観点からすればブレイクは典型的なロマン派の芸術家であると

いえましょう。

そして最後のダンテの『神曲』の挿絵集、これは未完に終わりましたが、ブレイクはベッドに横たわりながら、これを描きつつ最後は天国の歌を歌いながら亡くなったのでした。葛藤を繰り返した人生でしたが、本人自身はそれほど不幸ではなかったかもしれません。

では、以後はブレイクの美術的な仕事を瞥見していきましょう。

4. ブレイクの美術——スライド

① 銅版画作品

ここでは、ブレイクが生活の糧を得る職業であった銅版画師としての仕事を見ていきましょう。銅版画師と言っても出版物のための複製銅版画を制作することが主体であって、創造的なことは求められていませんでした。彼はこの仕事でエッチング、エングレーヴィング、スティブル技法（点刻）を習得して、主題・目的に合わせて用いましたが、「線」を重視する彼の芸術観もあって、最も線の力が発揮できるエングレーヴィングの方に関心が向いていきます。それとともに、銅版画におけるオリジナル表現を目指し、16世紀の銅版画の技法と表現を体得して行くようになります。18世紀の職人らしい初期の銅版画から晩年の傑作、『ヨブ記』の銅版画集までの展開を紹介します。

② 彩飾本 (illuminated books)

ブレイクは銅版画師という職業からエッチング技法を展開させた新たな銅版画技法、凸版の銅版画を発想します。この印刷技法で挿絵・装丁、さらにはテキストを一枚の版に作り、それを刷って（色刷りもあり）、さらにそこに手彩色をするという方法で、1780年代末頃から、自分の著作を私家版で出版します。じつは、詩人ブレイクの仕事は、ほぼすべてがこの本の形式で出版されているのです。そう考えると、詩篇に施された挿絵やデザイン性を鑑賞せず、詩のテキストのみを読みブレイクを理解したとする作業は、誰がみても片手落ちと感じるでしょう。ブレイクは、こうした本を西洋中世の彩飾写本にちなんで「彩飾本 (illuminated books)」と呼んでいます。ここでは、その「彩飾本」の展開を概略していきましょう。

『すべての宗教は一つである』、『自然宗教は存在しない』、『無垢と経験の歌』、『セルの書』、『天国と地獄の結婚』、『アルピオンの娘たちの幻想』、『アメリカ』、『ヨーロッパ』、『ユアリズンの書』、と続く過程の中で、この版画の印刷法が、厚塗りの絵具を転写するという方向に変貌して行き、そこからブレイクの中期の傑作「彩色版画」が誕生する経過も検討していきたいと考えています。

③ 絵画

ここからは、彼の絵画作品を見ていきます。特に、ブレイクが大いに期待していた「フランス大革命」から起るはずであった価値のうえでの大転換、あるいは「世直し」が空振りに終わってしまいました。ブレイクは精神的に苦難の時期であった世紀の転換期に、自らの思想の原点である「聖書」を主題として自覚的に絵画制作を始めました。まず、テンペラ画で連作を制作し、水彩画でも連作を制作します。これを契機に、ブレイクは、自分の宗教観をもう一度見つめ直すわ

けです。

そうした体験を前提に、ブレイクは蘇りと救済の道筋を「芸術＝想像力＝キリスト」の中に見出していきます。そうした彼の精神的変遷の過程は、晩年の彩飾本『ミルトン』、『ジェルサレム』の中で、神話仕立てで語られています。これについても簡単に触れておきましょう。そしてブレイク最晩年の未完の傑作、ダンテの『神曲』挿絵集に触れて、彼が理想としていた絵画表現の在り方がそこに具現されているのを検討しておきましょう。

* * *

ブレイクは肝臓病であったといわれ、齢 70 歳で亡くなりました。生涯をたどりながら、主だった作品しか言及できませんでしたが、多くの作品が残されていて、残念ながら、全部をお見せするわけにはいきません。銅版画家として出発しながら、水彩画、テンペラ画をも手がけて、そして独自の銅版画技法と印刷方法を開発していった人です。そういう側面から申し上げますと、けっして観念、思想において偉大な芸術家であっただけではなく、アーティストとしての技術的開発にも積極的に取り組んだ芸術家であった人間であったのをご理解いただければうれしく存じます。

最終的にブレイクがめざしていた芸術的な境地は、16 世紀のルネサンス芸術を原点としていました。ブレイクは一度もかのイタリアの地を踏みませんでした。イタリアへの憧憬から自己の芸術を形成していったのです。版画であれば、原点であるエングレーヴィング（彫刻）にたえず立ち返り、生涯をかけてそれを追究しました。若い頃、世間の中で身についた世俗の垢を徐々に落とし、清めつつ、純粹なものにいつも立ち返っていくという生き方をつらぬいた人間ではなかったかと思えます。

(文字起こし、長尾史子)

資料(1)

ウィリアム・ブレイク (William Blake) 略伝

- 1757 年 11 月 28 日、ロンドンで生まれる
- 1767 年 パースの素描学校に通い始める
- 1772 年 銅版画家ジェームズ・バサイアの徒弟になる
- 1779 年 修業期間を終え、ロイヤル・アカデミーの学校に入る
- 1780 年 銅版画家としての仕事を始める
- 1782 年 キャサリン。ブッチャーと結婚
- 1783 年 最初の詩集『詩によるスケッチ』を出版
- 1788 年 彩飾本の形式で自分の詩集や著作の刊行を始める
- 1793 年 彩飾本によるランベス預言書群の刊行を始める。
- 1795 年 モノタイプの大色彩版画連作を制作
- 1797 年 水彩画挿絵集に基づきヤング著『夜想』銅版画挿絵本を出版
- 1799 年 テンペラ画による聖書画を試み、その後水彩でも描く
- 1804 年 思想。芸術の集大成である預言書『ミルトン』(-09?)と『エルサレム』(-20)に着手 この間『ヨブ記』やミルトンの著作等を水彩で描く
- 1809 年 兄の家で個展。この頃にブレイクの芸術思想が明確な形をとる
- 1818 年 風景画家リネルを中心に若い支持者が集まる

1823年 リネルの依頼で『ヨブ記』の銅版画集に着手
1825年 ダンテの『神曲』挿絵集(未完)に着手。並行して銅版画も制作
1827年 8月12日 没

彩飾本による著作

『すべての宗教は一つである』(1788年頃) 『自然宗教は存在しない』(1788年頃) 『無垢の歌』(1789年) 『無垢と経験の歌』(1794年) 『セルの書』(1789年) 『天国と地獄の結婚』(1790年頃) 『アルビオンの娘たちの幻想』(1793年) 『アメリカ一つの預言』(1793年) 『ヨーロッパ一つの預言』(1794年) 『エアリズンの第一の書』(1794年) 『ロスの歌』(1795年) 『アハニアの書』(1795年) 『ロスの書』(1795年) 『ミルトン詩』(1804 - 1810/11年) 『エルサレム 巨人アルビオンの流出体』(1804 - 20?年)

資料(2)「日本におけるブレイク受容の展開の中での壽岳文章の役割」(省略)

小泉八雲『島根九州便り』(向日庵本)

